暗夜高千穗に

追はれて朝鮮へ

内務省第一技術課長
内務技師 島重治

學校を出たのが明治三十年、それから直ぐ大坂築港の工事に從事した、その頃の大阪築港工事は起工式を終へたばかりの時であつたそれからそこにゐること八年、明治三十八年日露戰爭の末期に、時の韓國政府から招聘せられて、燈臺を造るべく朝鮮に渡つた、これは朝鮮即ち當時の韓國政府が列强との條約に『燈臺を建設すべき』事を締結したので、その實現をすべく技師を日本に求めて來た。つまり私はそれに招聘せられて朝鮮行きとはなつたのである、その時、韓國政府の燈臺局長となつたのは我が石橋絢彥氏であつた、その後私が石橋氏の後を襲つて燈臺局長となつて朝鮮にあること六年、内地に歸つて信濃川改修工事に七年千曲川改修工事に六年そして現在となつたが、その間には別にお話するやうな何物をも持たない、殊に現在は方々の工事の記錄などを集めて、ただ監督をしてゐるといふに過ぎないのであるから、更に話柄に乏しい。

× × ×

『私が朝鮮即ち韓國に行つたのは、明治三十八年で日露戰爭は漸やく終熄したが、まだ媾和條約の開始される前であつたから、朝鮮總督府は勿論なかつた。韓國政府がどうでも燈臺を建設しなければならない必要に迫られて日本に技師を物色に來た始末だつた。だからあなた（編輯者）の言葉を借りて言へば、朝鮮に潛入した先驅的技術家といふことが出來やう。

そして彼地にあつて沿岸の燈臺をすつかり建設した、其頃は石橋氏が燈臺局長としてゐられる間に六七の燈臺が出來て、その余はみな私が局長として監督をしたのである、建設

Mr. S. Shima.
Imperial Covernment Domestic
Affair Dep't Engineer.
内務技師 島 重 治 氏

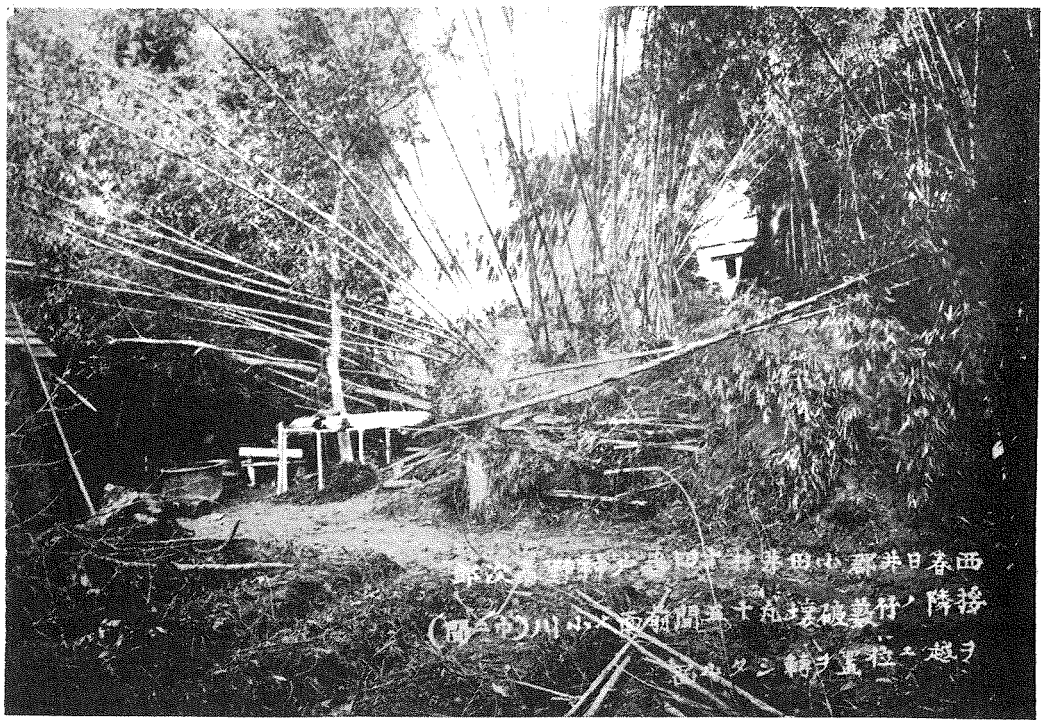
した燈臺は全部で幾つあつたらうか、今明確な數は記憶してゐないが、約四五十あつたと思ふ。この燈臺建設に從事した人々は日本人も私の外にかなりあつたが、それは多く工事の監督的な仕事が多く、人夫としては大抵朝鮮人であり、石工として支那人を使つてゐた

× × ×

この頃は内地でも隨所に鮮人勞働者を見、鮮人勞働者を使用した體驗談もほつほつ耳にする、がまだ明治三十八年頃には朝鮮勞働者を使つた日本人は殆どなかつた、さうした場合に、鮮人勞働者を使つたといふことに就ては或は嗤矢であると云ひ得るかも知れない。その頃の鮮人勞働者に就て感じたことは彼等はたしかに力は强い、重いセメント樽を擔いで足場の悪い海中に在つての作業だから却々骨が折れる、從つて力が强くなければ出來ないこの點は彼等に於て優れた點であつた。だかいけないことには、監督者が少しでも目を放すと、もうなまけてゐる。そこへゆくと支那人は、監督者がゐてもゐなくても、こつこつとして仕事をやつてゐる、自分の仕事だけは滯りなくやつてゐた。それから朝鮮人のなまけるといふことはもう一つ、それは金さへあれば決して仕事には出ない、彼等の生活はそ

の頃一日が日本金五錢、即ち五錢白銅一個あれば一日の生活が出來た、そこで一日の勞銀は三十錢位、三十錢あれば六日間の生活費はある、だから一日働いては五日間位休み、その間はばくちばかりやつてゐる、たゞへ仕事の間でも、少しでも監督が緩くなるゞ忽ち物影にかくれてばくちをやる、ゞいふ風であつた。

私達が朝鮮へ渡る時に乘つた船は大禮丸ゞいふ船であつたが、何しろ日露講話條約はまだ開始せられず、ロシヤ艦隊は日本海々戰で大體全滅したゞは云へ、物騷千萬なゞきであつた、私の乘つてゐた大禮丸も朝鮮海峽にさしかゝるゞ、折から夜の闇は海面を包んでゐた、ゞ、後の方から何艦ゞも知れずサーチライトを照らしながら追ひかけて來たそこで大禮丸はすつかり燈火を消して千鳥形に航路をゞつて、六連島まで引返して來た、後で聞いてみて分つたこゞだが、追かけて來た船は、我が高千穗であつたさうだ、まあそんなこゞが今ゞなつては懷舊心をそゝるだけである。燈臺のこゞに關しては當時の工學會誌に詳しく掲載報導した。

明治二十四年十月の濃尾大地震の岐阜縣西春井郡小田井村十四番戶、神野泰次郎宅隣接の竹藪破壞、凡そ十五間前面の小川(幅二間)を越え位置を轉じたる景。

Chnaged its location beyond a brook (12 ft.l wide) which is about 90 ft. from origina place, destroying a bamboo-jungle.